勝沼中学校

自ら考え、判断し、行動できる勝沼中生徒の育成
～　互いに認め合い、支え合う集団づくりを通して　～

Ⅰ　主題設定の理由

中央教育審議会新しい義務教育を創造する（答申）の中で「子どもたち一人一人が、人格の完成を目指し、個人として自立し、それぞれの個性を伸ばし、その可能性を開花させること、そして、どのような道に進んでも、自らの人生を幸せに送ることができる基礎を培うことは、義務教育の重要な役割である。自らの頭で考え、行動していくことのできる自立した個人として、変化の激しい社会を、心豊かに、たくましく生き抜いていく基盤となる力を、国民一人一人に育成することが不可欠である。」という記述がある。変革の時代、混迷の時代、国際競争の時代であるからこそ、一人一人の人格形成と国家・社会の形成者をいかに育成していくか、子どもたちに自ら考え、判断し、行動できる力、すなわち「生きる力」をどのように身に付けさせるかが、今の学校現場に求められている。このことは、新学習指導要領に対応し、山梨県教育委員会が示す「新やまなしの教育振興プラン」及び甲州市が推進している「確かな学力育成プロジェクト」にも大きく関わるものと考える。

“互いに高め合う「学級集団づくり」”をベースに、さまざまな角度から「生きる力」の育成にアプローチする研究を推進したい。学校生活において、さまざまな集団活動が展開されている。中でもその基礎である「学級集団づくり」については、Ｑ－Ｕ検査を活用しながらより良い集団づくりを継続して目指したい。また「学年・学校集団」「学習活動における小グループ（小集団）」さらには「部活動集団」等々、さまざまな集団活動において、互いに認め合い、支え合う集団づくりを追究するとともに、子どもたちが「音・声」による自己表現力を活用しながら、主体的に考え、活動することにより豊かな心を育て、「生きる力」の育成を目指したい。

Ⅱ　研究の内容

1　学年別研究会

学年の実態、現状を分析しつつ、より良い学級・学年集団づくりをする手立てを考えてえていく。Ｑ－Ｕ検査の分析を行い、集団作りに生かしていく。

2　教科別研究会

・自己表現力の育成
・個に応じた指導の実践（習熟度別授業、ＴＴ、小グループの活用など）
・言語活動の充実、読解力向上に関する研究
・基礎基本の重視、基礎学力の向上に関する研究と実践

3　領域別等研究会

・道徳教育の充実

・特別支援教育の実践

・読書活動の推進

・「確かな学力」育成プロジェクトに関わって、①授業づくり②集団づくり③保護者地域との連携の領域３部会を校内研究の中に組織し、取組みの推進

※授業づくり・授業改善部会

・授業案の検討

・「確かな学力」の育成にむけた授業づくり・授業改善

※集団づくり部会

・Ｑ－Ｕ検査の分析をまとめ、取組（対策）を推進

※保護者・地域と連携部会

・家庭学習の定着を図る取組

Ⅲ　成果と課題（職員アンケートをもとに）

・継続研究ということで、さらに強い横の「絆」、縦の「絆」が育成できるとよいと思う。それが、支えあうことができる集団づくりに結びついていく。

・基礎、基本の定着が不十分な生徒にとって表現力の育成が難しい面もあるが、表現することを通して学びが深まっていった。今後も積極的に取り入れる姿勢が大切である。

・ワークショップ方式は、成果や課題も明確にわかり、とてもよいと思う。

・ＱＵ検査の分析を学年で２回行った。学級、学年の実態がよく把握できた。２回の変化を見ていくことは集団づくりに大きな効果があった。さらに、学校全体で共有していくことや、教科指導についての留意事項が明確になるとよいと思う。そして、全体で集団づくりを考えていくことが大切である。

・「授業は生徒と教師が一緒につくるもの」という基本的な姿勢を大切にし、各学年生徒会の取組として計画的に取り組むことで、落ち着いた学習環境を作り上げている。学習規律を確立させながら、学習意欲につなげていくことが大きな課題である。

・年間を通じてあいさつ運動を継続することにより、全校へその輪が広がろうとしている。日常生活全般において「あいさつ」を大切にしようという意識が広がっている。形式的にならないように、その場に応じた気持ちのある自然なあいさつを、学校内外にとらわれず、自分から進んでできるようにしたい。

おわりに…　市のプロジェクトと連携していく中で、生徒の実態に合わせた勝沼中独自の取組を展開していくことにより、自ら考え、判断し、行動できる勝沼中生徒の育成へとつなげていきたい。

（　研究主任　　秋山　達明　）